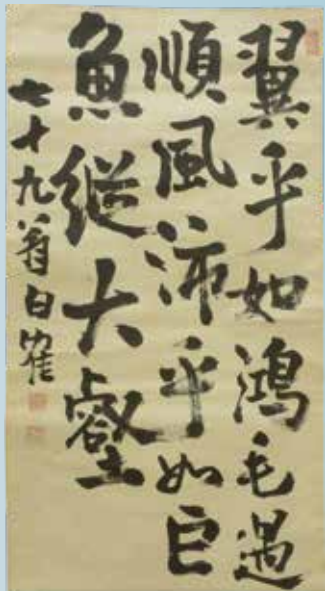


嘉永4(1851)年、藩主島津斉彬公の助教として招かれ、牡丹の間で「論語」の講義が始まりました。



『三行書』掛幅 白鶴七十九歳

翼乎如鴻毛過順風
沛乎如巨魚縱大壑
七十九翁白雀

はばたけば、まるで鳥の羽毛が追い風を受けて舞い上がるように、勢いは、まるで巨大な魚が大海の渦を自由に泳ぎ渡るように、白鶴自身の自由な境地を詠んでいます。

『送秘書晁監還日本』屏風(右隻)
白鶴八十五歳

中国に遣唐使として滞在していた日本人・阿倍仲麻呂(中国名 晁衡)との別れの時の寂しさを、「壮大な景色」とともに詠んだ唐の時代の詩人王維の詩です。

積水不可極
安知滄海東
九州何處遠
萬里若乘空
向國唯看日
歸颿但信風
鰲身映天黑
魚眼射波紅
鄉樹扶桑外
主人孤島中
別離方異域
音信若爲通
八十五翁 白鶴



『観魚』掛幅

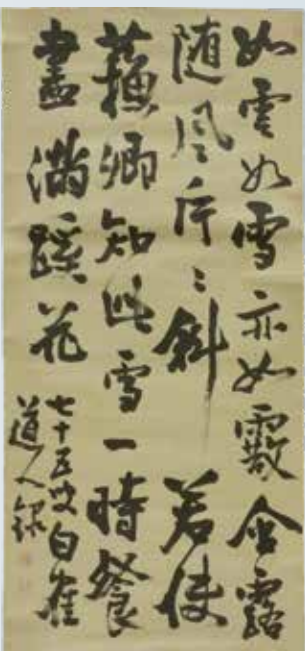
白鶴七十七歳



観魚とは、魚を見ることをとおして、心を落ち着かせ「ほんとうの自分」を見ることになるという「禅」の教えを説いたことばです。

『七言絶句』掛幅

白鶴七十五歳



如雲如雪亦如霰
含露隨風片片斜
若使蘼艸知此雪
一時餐盡滿蹊花
七十五叟 白雀
道人録

花びらの舞う様子を雪にたとえ、雪を食べて命をつないだ前漢の蘇武が見たら、きつと本物の雪と間違えて、花びらを口にしてしまうだろう、という風雅でユーモラスな詩です。

文化人との交流

絵師と書家のコラボレーション

福田太華筆『鹿図』掛幅

鮫島白鶴讃

白鶴七十七歳

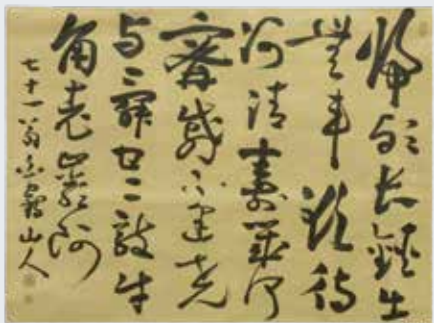


京都の秋の情景を詠んだ白鶴の詩をもとに、太華がイメージを膨らませ絵に描きました。

※ 福田太華(一七九六～一八五四)は、江戸時代後期に活躍した熊本藩の馬医であり、絵師。他にも弓馬刀槍・火術・和歌等多彩な才能を発揮した人物です。

弘化4(1847)年に御右筆頭格御廣敷番頭となり上京します。

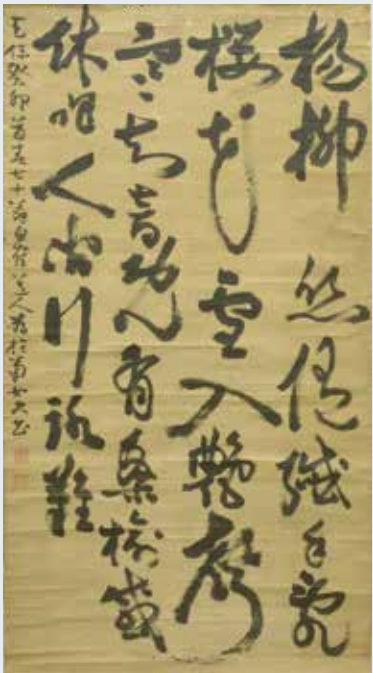
『六行書』掛幅 白鶴七十一歳



帰歟長鋏出無車
欲待河清壽幾何
甯戚不逢堯与舜
空敲牛角老巖阿
七十一翁白鶴山人

志はあるのに世の中に用いられない、ただ老いていく嘆きを詠んでいます。

『四行書』掛幅 白鶴七十歳



楊柳絲絲隨纖手乱
桜花雪入艶聲寒
知音既有桑榆感
休唱人間行路難
天保癸卯首春七十翁
白雀道人為於菊女史書

「春の美しさ」や「人生の達観」、「信頼できる相手へのありがたさ」が詠まれています。

特集 企画展

鮫島白鶴の

人と書と

黎明館3階

企画展示室、日本画・書展示室

令和7年 12月11日(土) — 令和8年 3月1日(日)

鮫島白鶴(さめしま はっかく)(1773～1859)は、鹿児島城下に生まれ、幼い頃から学問を好み、詩をつくり、書や絵にも才能を発揮しました。江戸や琉球、京都などさまざまな地に赴くたびに、その書は高く評価され、生前から偽物が出回るほど人気のある書家でした。特に京都では、近衛家からも絶賛され、8歳のお祝いの席では寿ぎの歌を贈られたといひます。また、藩主島津斉彬に『論語』を教えたほどの学識もありました。

お酒を愛し、豪快で自由な性格だったと伝えられています。その人柄は書にも表れ、のびのびとした筆づかいや、大きな筆で大胆に描かれた墨の表情は、まるで絵のような迫力があります。

白鶴の生涯から約250年、没後150年以上が過ぎた今も、その書は力強く、みずみずしい息づかいを感じさせます。

本展では、白鶴の掛幅や屏風等約40点(一部展示替えあり)を展示します。白鶴という人物を思い浮かべながら、その書の魅力をぜひ味わってみてください。